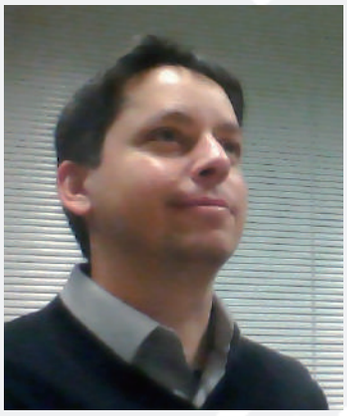
GAKKAN GAKUFU 44

Interview

メディア／ジェンダー／ネイションの交差するところに日本近代を探り出す

ジェイソン・カーリン 准教授



歴史学という入り口から文化研究、メディア論、文化社会学などを経て、複雑な日本近代のあり方を捉え返す。そうした大きな課題に、事実＝細部への愛をもってとりくんでいくまなざしには、対象へのこだわりから生まれる厳しさを垣間見ることができる。昨年単著を出版されたカーリン先生に、その学問的履歴・問題意識、学生へのメッセージをうかがった。

■ カーリン先生のご専攻はジェンダー論ですが、昨年 *Gender and Nation in Meiji Japan: Modernity, Loss, and the Doing of History* (University of Hawaii Press, 2014) を出版されました。メディア史とジェンダー史、ナショナリズム論などが交差した刺激的なご本です。このご本を書かれた知的な背景についてご説明頂けますか？

私の研究は、簡単に言えば、メディアにおいてジェンダーがどのように表象されているかという問題を扱うものです。例えば、最近出版した拙著では、近代日本における流行というメディア現象を、明治期の日本の世相や思想を描写する多数の資料を使って、ジェンダー論的分析を試みています。その当時の日本における「移ろい」と「永遠」の言説との関係性を明らかにすることにより、ジェンダーアイデンティティの形成とナショナリズムの台頭のプロセスを説明しようとするものです。

私は、歴史学で博士号を取得しましたが、当時アメリカで主流だった歴史研究の方法論から一歩踏み出して、文学、人類学、映画学等を専門とする研究者の指導も仰ぎ、理論に加え、テキスト分析の実践的な方法論を扱う文化史研究者としてのトレーニングを受けたので、テキストがどのように意味をもたらすのか、という問題に対して、一元的な分析ではなく、複数のテキストを分析するというアプローチをとるようになりました。その中で、意味というものは、複数の種類のメディアに渡って表象されるという考え方に興味を持つようになりました。明治期の問題を取り扱った研究においては、当時の流行歌の歌詞や、冒険小説、政治的風刺画、雑誌など、様々なメディアを分析し、この考えの検証を試みています。

■ 一方で、アイドルなどの現代的現象にもご関心を持たれていると聞きます。歴史研究とはどのような意味で関連しているのでしょうか。

現在取り組んでいる現代日本におけるアイドルの研究では、アイドルをそのパフォーマンスという点のみから見るのではなく、アイドルのイメージがどのように様々なメディアにおいて出現し、循環しているか、またどのようにファンの側に受け取られているか、ということに焦点をあてています。面白いのは、明治期の日本研究においては、「冒険世界」などの当時の少年雑誌の投書欄に着目して、分析していたのに対し、今行っている現代日本のアイドル研究では、ファンがどのようなリアクションをしているのかを見るために、Twitter などネット上のソーシャルメデアを分析しています。テクノロジーの進化によって、メディアの形はずいぶん変わりましたが、そこに秘められた研究上の重要な可能性は変わっていないので、同じように分析の対象となるわけです。

■ 多方面に研究分野がおよぶので様々な学生さんが集まってくると思いますが、研究指導ではどのような点に留意されていますか？

大学院生を指導するにあたって、最も力を入れていることは、学生が自分たちの研究を一流の学術ジャーナルに掲載すること、またそのレベルの実力をつけられるようにする、ということです。私は情報学環に来る前に、社会情報研究所で、研究職と平行してオックスフォード大学出版会が発行する学術ジャーナルの編集に 5 年間携わった経験があり、学会における出版のプロセスや仕組みを知るに至りました。学会で認知されたジャーナルに投稿し、掲載されるという経験は、大学院生にとって、プロの研究者となる上でとても大事な経験だと思います。これは、英語の professionalization という概念に通じます。そうした経験は、学生が研究者としての業績を作るというだけではなく、その過程で研究者としてのあり方に関して学ぶことができる好機なのです。

■ 最後に学生のみなさんにメッセージをお願いします。

ITASIA コースは 2008 年に発足しましたが、これまでに数名の院生が博士論文の第二予備審査を終える前に、国際的なジャーナルに論文を掲載しています。これは、ITASIA コースの存在を国内外で知ってもらうきっかけとなるだけでなく、人文社会科学の出版部門では世界的なランキングで圏外となってしまっている東京大学の現状を好転させるきっかけにもなりうるのではないかと思います。

私は大学院生に、国内の学会誌や紀要に投稿することにとどまらず、積極的に国際的なジャーナルへの投稿に挑戦するように促しています。それぞれの専門分野の最先端で研究を発信していくという気概のある研究者を目指すのであれば、必要不可欠な経験であると思います。大学院生にとって、国際的なジャーナルに投稿し掲載されるというプロセスは、紀要などと比べると遥かに時間のかかる、難しいものではありますが、それによって、「学界とは、すべての研究者が共同で作り上げていくものである」ということを学ぶことができます。我々は大学院生の時期において、指導教官から学び、学生仲間から学び、そして、各分野の多くのエキスパート達から学ぶことができます。そのプロセスを通して、学問は進化し、我々の集団的知性は成長していくのです。

情報学環・空間情報科学研究センター 共同シンポジウム開催案内

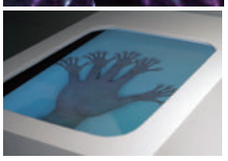
池内 克史教授

このたび池内克史教授が大川賞を受賞されることとなり、また本年度末をもって退職されることから記念シンポジウムを開催する運びとなりました。池内教授は人間の視覚機能を計算機上に構築することを目的としたコンピュータビジョン分野において基礎理論から応用展開まで長年にわたって研究に励んでこられました。特に画像の明るさから形状を推定するShape from Shadingや、画像生成のプロセスを物理的にモデル化して問題を解くPhysics-based Visionと呼ばれる分野において先駆的な研究者の一人です。また基礎理論だけでなく、ロボットプログラミングや実物体の3次元モデル化(Modeling from Reality)技術の確立にも大きく貢献しました。近年では、これらの技術を発展させて、文化遺産のアーカイブ化や解析、展示を目的とした学際的研究分野であるe-Heritageを立ち上げ、考古学、建築学、民俗学といった異なる分野の研究者と連携して国内外における分野の発展に大きく貢献しました。今回、これらの業績の情報通信分野に対する功績が認められて大川賞を受賞することとなりました。記念シンポジウムでは同じく受賞者であるOlivier Faugeras博士を始め、世界的に著名なコンピュータビジョン研究者を招待してご講演を頂く予定です。また池内教授の講演は本学における最終講義となりますので、この機会に是非足をお運び頂ければ幸いです。（先端表現情報学コース・大石岳史）

■ 大川賞記念コンピュータビジョンシンポジウム
日時： 平成27年3月5日（木）9:00〜16:00
場所： 東京大学　本郷キャンパス　伊藤謝恩ホール

○ 大川賞受賞記念講演Ⅱ＋東京大学最終講義
14:40〜16:00 池内克史（東京大学大学院・情報学環 教授）
※聴講無料

第 16 回制作展 開催



本年度で16回目を迎える東京大学制作展を、11月13日から17日までの計5日間、工学部2号館の展示室などで開催した。東京大学制作展では、学生が現在研究している内容や、研究の過程で身につけた技術を、「作品」という形で表現し、学内や学会等での専門家に向けた研究発表に終わらせることなく、広く一般の方々に見て頂くことを目的としている。

今回のテーマは来場者の日常を「拡張(extension)」するような「体験(experience)」を提供し、それが多くの「驚き(exclamation)」を生むような空間を創りあげたいとの思いから「！！！(triple-ex)」と定めた。このテーマの下、各作品は、作家の研究から派生したものから、趣味嗜好を色濃く反映したものまで、各作家の強い思いの詰まったものとなり、その数は全18作品に達した。その結果、計550人余りの来場者を迎えることになった。

今回、第16回東京大学制作展を実施するにあたり、約8ヶ月にわたって準備を重ねてきた。制作展では、各々の作品制作だけではなく、会場設計から広報活動まで全ての企画・運営を学生が主体となって行う。授業時間に全体でのミーティング、作品の進捗確認などを行い、さらに各担当班に別れての作業も行ってきた。さらに会期中にはアンケートを実施し、会期後その集計結果を元に全体の反省点をまとめ、来年度への引き継ぎとしてまとめることで来年度以降の制作展の更なる質の向上を目指している。（教授・苗村健）

Congratulations！！

James Dyson Award 受賞

英国ジェームズダイソン財団が主催する国際的なデザイン賞 James Dyson Award 2014 に、情報学環暦本研究室所属の新田慧君、樋口啓太君と東京工業大学制御システム工学科在籍の田所祐一君が応募した"HoverBall" が国内第五位で入賞した。12 月 1 日に表彰式があり賞状を授与された。James Dyson Award は、「日常の問題の解決」をテーマにした学生など若いデザイナーのための国際デザインエンジニアリングアワードで、今年で 9 回目となる。

総務省「異能 vation 事業」採択

ICT 成長戦略の一つとして総務省が平成 26 年度から開始した独創的な人向け特別枠「異能(inno)vation」プログラムに、学際情報学府博士課程の落合陽一君（暦本研究室）の応募した「コンピューテーショナルフィールドを用いたヒューマンインターフェースの実現」が採択された。このプログラムは、常識にとらわれない独創的な人への支援により革新的な技術と人材を創出することを目的とするもので、617 名の応募者から最終 10 名の本採択者の一人として選出されたものである。

最優秀論文賞受賞

情報学環助教の M. Fahim Ferdous Khan 先生が、国際学会「IEEE Global High Tech Congress on Electronics (IEEE GHTCE) 2014」にて、共著論文 "Leveraging Hardware Support for Security of e-Services with eTRON Architecture" により、最優秀論文賞を受賞した。

情報学環・空間情報科学研究センター共同シンポジウム開催報告

2014年10月22日、東京大学・ダイワユビキタス学術研究館において、大学院情報学環と空間情報科学研究センターによる共同シンポジウム「ユビキタスとオープンがもたらすモノ・人・場所の状況認識」が開催された。

最近のユビキタスコンピューティング、IoTの進展に伴い、行政・流通・防災など生活の様々な場面において、状況に応じた最適なサービスの提供が可能になっている。また、これらのサービスを実空間で展開するにあたり、「モノ」の認識と並んで「場所」の認識が重要となるとともに、「実空間」と「仮想空間」を関連づけるための情報社会基盤整備が進んでいる。

このような社会的背景のもと、情報学環と空間情報科学研究センターでは、「空間―情報―人間」を総合的に扱う共同シンポジウムを定期的に開催しており、第3回目の今回は、小口センター長による開会挨拶に続き、情報学環から坂村教授、越塚教授、石川、空間情報科学研究センターから浅見教授、古橋特任研究員、小林助教による話題提供が行われた。具体的テーマとしては、ユビキタスコンピューティングと状況認識、縮小社会における都市情報認識、空間情報とオープンデータ、オープンストリートマップが目指す次世代マップ、動物間ネットワークによる空間情報センシング、デジタル時空間情報時代の空間リテラシーが取り上げられ、各最新の取り組みが紹介された。

今回の議論から、モノ、場所、およびそれらの関係についての情報をユビキタスかつ自動的に取得するための技術体系がオープンでユニバーサルな形で規定された社会の重要性が明らかにされ、そのような「ユビキタス状況認識社会」の実現に向け、両部局が今後も協働して研究を進めることが確認された。（准教授・石川徹）

ホームカミングデイ開催

10月18日の東京大学ホームカミングデイの一環として、情報学環では「人間とテクノロジーとの関わり」を統括テーマとする講演会を福武ホールラーニングシアターで開催した。学環長からのオープニングメッセージに続き、佐倉統教授による「科学の知識と日常生活」、生産技術研究所の山中俊治教授による「人と技術の関わりを先導するデザイン」と題する講演が行われた。講演後には、教育部交流会との合同での懇談会が開催され、在学生、卒業生、教員、学環関係者の交流が深められた。

（企画広報委員長・暦本純一）

山中 俊治教授

佐倉 統教授

2014留学生交流イベント 根津・谷中・六義園ウォーキングツアー

学際情報学府では近年、留学生と日本人学生の交流を目的としたイベントを企画している。今年は根津・谷中・六義園ウォーキングツアーを実施し、学生、教職員を合わせて22人が参加した。文京区ふるさと歴史館よりツアーガイドをお招きし、午前中は根津神社や谷中銀座を散策し、午後は六義園にて紅葉を鑑賞した。後日行ったアンケートより、「普段、コモンズでも出会わない方とも話が出来て嬉しかった。」との声があった。また「多様なバックグランドの人と知り合う機会がさらにあれば」という意見も多く、今後のイベントの参考にしたい。（留学生支援室）

BOOKS

『基礎情報学のヴァイアビリティ：ネオ・サイバネティクスによる開放系と閉鎖系の架橋』

西垣通，河島茂生，西川アサキ，大井奈美編
/ 東京大家具出版会 2014年9月

本学名誉教授の西垣通先生を中心とした情報学環とかかわり深い研究者たちによる編著が出版されました。長らく情報学環で教鞭をとられ、基礎情報学の理論的支柱を築き上げてきた西垣情報学の知的広がりと深まりをあらためて感じ取ることができる書です。

『広報・PR論 ―パブリック・リレーションズの理論と実際』

伊吹勇亮，川北眞紀子，北見幸一，関谷直也，薗部靖史著
/ 有斐閣 2014年10月

組織がどのように情報を伝え、どのように利害関係者と関係性を構築するか。マス・コミュニケーション研究、広告研究などの隙間に存在する「パブリック・リレーションズ」「広報」について、研究者だけで書かれた本格的な教科書。行政・企業実務とメディア・コミュニケーション研究の接点、CSR、危機管理、環境問題、災害、社会貢献などの社会事象を題材としたコミュニケーション研究についての気づきになれば幸いである。

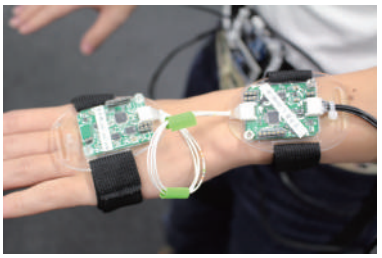
『文化社会学の条件』

吉見俊哉編
/ 日本図書センター 2014年9月

情報学環の吉見俊哉教授が編纂した文化社会学をめぐる歴史的研究の論文集。各方面で活躍する学府OB,OGが執筆にあたっている。吉見教授の「師匠」にあたる見田宗介東大名誉教授の「社会意識論」からスタートし、戦前、戦中、戦後を貫く「文化」の社会学のあり方を丁寧に捉え返す。学府には「文化」の研究に取り組む学生も多いと思うが、どのような分析がいかなる意味で文化社会学たりうるのか、その条件を本書から読み取ってほしい。

TOPICS

共同研究「ウェアラブル・メディアの社会的デザイン」について



「ウェアラブル・メディアの社会的デザイン」は、東京大学大学院情報学環（水越伸・苗村健・山内祐平研究室）と博報堂 DY メディアパートナーズが進めている共同研究で、ウェアラブル・メディアに関する 4 回の講演＋2 回のワークショップで構成されるプログラムである。

電子メディアの小型化や頑健化などで、情報技術を人間の活動全般に近いところで「身に付ける」ことができる状況が整いつつある。かつては意識的に入力をする、出力を読み取るということが情報世界との接続方法であったが、現在では無意識の活動を含めて情報技術と密着して生を営む状況が生まれている。本プログラムでは、これまで 4 名の専門家がそれぞれメディア業界、教育工学、デジタルコンテンツ制作、そしてメディア史の立場から講演をおこなった。

今後のワークショップでは、現在のウェアラブル・メディアが取り巻く私たちの生活環境を見つめ直すための課題設定を行い、参加者同士の議論を経て成果作成を目指す。具体的には「もし、iPhone が世の中に登場していなかったら 2015 年のメディア環境はどうなっていたか」という SF 的なシナリオを作成し、スライドショー映像を作成するという内容である。理工系、人文社会系、芸術デザイン系の、リーディング大学院 GCL プログラムの学生、学府大学院生などの参加者が越境的にグループをつくり、科学技術史や経済状況を参照しつつ「あり得たかも知れない現在」をリアルに想像／創造する。その成果は東京大学、博報堂の双方で 2 月から 3 月にかけて発表する予定である。

望むと望まざるとに関わらず、私たちの生活環境は ICT 技術に取り囲まれている。今回、ワークショップという非日常的な状況を設定し、異分野の人々と対話を重ねることで、新技術や新製品、新機能を単に礼賛するのとは異なる視座・思索の中でテクノロジーと社会の距離を測る態度を身に付けていく機会となることを企図している。（特任助教・会田大也）

学環・学府研究倫理ワークショップ開催

11 月 28 日（金）工学部 2 号館 9 階 93B（プレゼンテーションルーム）において、学環・学府 研究倫理ワークショップシリーズ「研究不正から自分の身を守るにはどうすればよいか？」（III/GSII Research Ethics Workshop Series: How to Protect Yourself from Research Misconduct）の第 2 回会合が開催された。このワークショップシリーズは、教職員と大学院生がお互いに協力して、学環・学府における来年度の研究倫理教育プログラムのあり方をボトムアップの形で考えていく場として企画された。

第 1 回（7 月 18 日）は博士課程の大学院生の方々をパネリストとしてお招きしたのに続いて、第 2 回となる今回は、学府の必修授業である「学際情報学概論 II」において研究倫理に関するグループワークを行った修士課程の大学院生の方々をお招きして、日本語のみならず英語の説明も加えた形でのプレゼンテーションをしていただいた後に、参加者とのディスカッションが行われた。

プレゼンテーションでは、学内外における研究不正防止に向けた近年の動きが紹介された上で、研究不正をなくすための取り組みにおいてはトップダウンではなくボトムアップで「院生がイニシアチブを」とっていくことの重要性が示された。特に、来年度に学府において「研究倫理」という名称で新たな必修授業を行う場合にはどのような内容や方法が望ましいかをめぐっては、例えば、「過去の不正事例の例をいくつか挙げて、不正に至るまでの、共通する傾向や背景を教えてほしい」などの、さまざまな積極的かつ具体的なアイデアが提案された。

今回のプレゼンテーションで説明されていたように、文部科学省の新たな「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」が 2015 年 4 月 1 日から適用されることとなり、今後の学環・学府においても不正行為防止体制の強化が求められる。学環・学府において今年度に新たに立ち上げたこの「研究倫理ワークショップシリーズ」の第 1 回・第 2 回会合を通じて得られたアイデアや知見は、来年度のための準備を進める上で大変貴重なものとなった。第 1 回･第 2 回会合のパネリストの方々、司会の佐倉統教授、参加してくださった教職員・大学院生の方々をはじめ、このワークショップの実現のためにご尽力いただいた皆様に感謝を申し上げます。（研究倫理担当者・山口いつ子、学務係長・渋谷哲）

あとがき

今号は、研究倫理についての記事を重点的に配置しました。昨今、研究倫理が社会問題化していますが、院生のみなさんはそれを他人事とは考えず、しっかりと我がこととして受け止めていただきたいと思います。大胆さと繊細さの併存は知的にも倫理的にも重要な課題です。（企画広報委員会・北田暁大）

学環学府 44 2. 2015

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies,
The University of Tokyo

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

編集委員：北田暁大・岡田美保・暦本純一・佐藤彩夏

mail：news@iii.u-tokyo.ac.jp / http://www.iii.u-tokyo.ac.jp